『第一次国共合作の研究――現代中国を形成した二大勢力の出現』への石川禎浩氏の批判に答える

北村　稔

『史林』第八二巻二号（一九九九年三月）に、拙著『第一次国共合作の研究―現代中国を形成した二大勢力の出現』（一九九八年四月、岩波書店）への石川禎浩氏による書評が掲載された。表面は詳細で精緻な文章だが中身には批判のための批判の嫌いがあり、多くの誤解と誤読に基づく文章である。

書評には原則がある。最初に、原著の「問題意識」と全体を貫く「分析の枠組み」を明示することである。「問題意識」については、石川氏も冒頭で説明を加える。国共合作研究は「イデオロギー対立にさらされてきた」のであり、その結果「国共合作史の節目節目の事象が長年にわたり複雑に入り組んだ政治的解釈に影響されてきた」のであり、著者の意図は「このような政治的解釈のためにことごとに食い違う見解を、ひとつひとつ再検討することから出発しなければならないということになる」である、と。

しかし石川氏は、序章全体を使って説明されている「分析の枠組み」に全く言及していない。著者は国共合作の動向を決定した要因として、◎「国内の混乱」、◎「ソヴィエト・ロシアの出現」、◎「国民党とボルシェヴィズム」、◎「新しい革命組織を支えた人材」、◎「階級闘争をめぐる国共間の矛盾」、◎「合作方式と国民党の政治戦略」、◎「蔣介石―国共合作の継続を最後まで試みた人物」等の項目を設定した。そして項目ごとに、以下の内容を論じた。すなわち〈辛亥革命後の混乱する国内政治の主導権復活をめざす国民党の政治路線〉、〈軍閥の存在とその性格分析〉、〈中国内への親ソ連勢力の扶植を至上目的とするソ連の意図〉、〈ボルシェヴィズムの組織論に基づき実行された国民党組織改革の効果と問題点〉、〈ボルシェヴィズムの組織論に基づき蔣介石を校長に建設された黄埔軍官学校に入校し、中国再統一をめざす「国民革

命」に身を投じて国民党の軍事力の要となった若き共産党員と国民党員の存在〉、〈国共間に解決不可能な矛盾として存在した階級闘争をめぐる政治路線の相違〉、〈ソ連以外の勢力や共産党以外の勢力とも結ぼうとする国民党の政治戦略と共産党との緊張関係〉、〈国共合作に存在した矛盾の調停者として行動しソ連の支持を維持して次第に権力を確立した蔣介石の役割〉である。ところが石川氏はこれらの内容をとりあげることなく、著者が要所要所で示した中国の政治力学（派閥、地域性）や伝統的な社会・政治風土への着眼だけを殊更に指摘する。そして、これらの着眼は原著を特色あるものにしていると述べ一定の評価を与える。これでは、原著には歴史分析の枠組みが希薄であり、無原則な恣意的分析が行われているとの誤った先入主を読者に与える。そして、この先入主に近い観点から石川氏の批判が展開される。

はじめに石川氏は、原著の主要テーマである蔣介石再評価に批判を加える。すなわち著者の蔣介石分析は「政治評論家風の視角」に基づき、「あえて断言すれば……歴史学的分析よりもむしろ新聞の政治欄によく見られる政界風聞式解釈の積み重ねであるとの感を免れない」と述べる〔以下、引用文中の傍線や（　）は北村が補った〕。そして「本書には面子をキー・タームをする政治手法、特に蔣介石のそれがたびたび解説され」、「面子を大事にする彼（蔣介石）のしたたかさや非凡さが彼れの台頭と覇権をもたらしたとされる。……他方、先行研究に対する（北村）氏の批判も、それらが蔣介石に対して、甘い人物評価をしている、甘く見ている、という判断からなされることになる」、「かかる視点から蔣介石を見たことによって蔣介石と中共との対立の原因は解明されず、両者の勝敗が政治的手腕の差に還元されるのみで、対立は自明のこととして放置されている。……政治評論ではない（北村）氏の見解がほしかったところである」、と述べる。

しかし石川氏が無視した序章の「分析の枠組み」を一読すれば、著者が蔣介石に対し「政治評論家風の視角」に甘んじるものでないことは瞭然である。石川氏が解明されていないと批判する「蔣介石と中共との対立の原因」についても、第三章や第四章で組織の主導権争いや階級闘争の是非を巡る議論などを軸にくどいほど論じられている。石川氏が批判の矛先を向ける蔣介石に対する著者の人物論的評価や感慨（個人的性格や行動様式に見られる中国人的特質へのコメント）の前後には、評価や感慨を導くに至らせた詳しい経緯説明がなされている。どこを取っても「政界風聞式解釈の積み重ね」であるわけがない。かくして石川氏の「批判」は、著者が下したの蔣介石への人物論的評価や感慨の結論部分の字句だけを切り取って組み立てられた曲解にすぎないことになる。

原著の他の部分に対する石川氏のコメントも、蔣介石関連の批判と大同小異である。全体の内容を正確に把握せず一部分だけに光を当て、勝手な解釈に基づきコメントするのである。

石川氏は原著に見られる「新見解」として、第二章二節の〈商団事件に英国の支援はなかった〉、第三章三節の〈中山艦事件は突発事件ではなかった〉、第四章三節の〈国民政府の武漢移転はボロジンの陰謀に非ず〉、第五章三節の〈いわゆる蔣介石の「四一二クーデター」に虐殺なし〉、第六章二節の〈武漢国民政府の崩壊は経済政策の破綻による自壊であって、経済封鎖などなかった〉、第六章五節の〈（一九二七年）六月一五日の分共（国共分裂）後にただちに共産党員への迫害が始まったわけではない〉、を取り上げる。そして「にわかに首肯しがたいものもあるが、……長らく不鮮明だった問題のいくつかに光を当てた点は評価されるべきである」と述べる。しかし勝手な解釈の一例をあげると、第六章の最大のテーマは、農民運動の激化が米の流通停止を招来し国共合作体制のもとでは解決不可能な食料危機を出現させたこと、そしてこの構造的矛盾により国共合作は終焉せざるをえなかった事実を詳しくあとづけた点である。筆者はこれこそ「新見解」だと自負している。中国近現代史を研究する者にはこの「新見解」がたやすく看取されると思われる。それにもかかわらずこのポイントを指摘せず、「長らく不鮮明だった問題のいくつかに光を当てた点は評価されるべきである」と軽くすまされると、苦笑いするしかない。

さらに、原著の「結びにかえて」に全く言及しないのは如何なものであろう。ここには国共合作の歴史的位置づけと今日的問題点がボルシェヴィズムとの関連のもとに論じられ、原著の副題である「現代中国を形成した二大勢力の出現」の経緯が解説される。この部分の内容を省略すると、原著は僅か三年で終焉した第一次国共合作の経緯だけを扱った研究へと矮小化される。

次に、石川氏が著者は資料の字句の意味を深く探りすぎ、かえって「深読み」に陥っていると批判する点を述べてみたい。著者は第四章二節や同五節で、中国近現代政治史資料一般の持つ性格を説明したが、速記録や会議録などは別にして相当数の資料は自己の正当性を述べたてようとする「政治主張」の文書なのである。現在においても、中国共産党が「政治主張」の根幹を揺るがせかねない国共合作中の「国民党政治委員会速記録」の一部分を、「欠落」と称して公開資料中から削除していることを指摘した（第六章注一六三）。従って資料を読む場合には字句の背後にある意図に留意して、注意の上にも注意して読むべきなのである。「深読み」だとかたずけるのは、研究者として如何なものであろ

う。

石川氏は中山艦事件に関する『民国十五年以前之蔣介石先生』の記述をめぐる第三章三節の著者の解釈を、「深読み」として批判する。著者はロシア軍事顧問チェレパーノフの言う中山艦事件は突発事件ではなく蔣介石の周到な計画であったという説に賛同し、この説を裏打ちする証拠を『民国十五年以前之蔣介石先生』の中に見いだそうとした。そして中山艦事件に関する人物が「友」または「客」とのみ記され名前を伏せられている事実に注目し、これらの人物名を複数の資料から論証しようとした。名が伏せられたのは、明らかにすると計画的行動があらわになるからである。ところが石川氏は、この論証部分に検討を加えずに「深読み」批判をすすめる。そして著者が論証の核心部分との関係は薄いがという論調のもとに指摘した事実、すなわち「友」、「客」という記述上の不自然さを少なくするために、『民国十五年以前之蔣介石先生』の草稿である『蔣介石年譜初稿』にはあった潘文治という事件に直接関係のない人名までもが、『民国十五年以前之蔣介石先生』として公表されるさいに「友」として名が伏せられたのだろうと述べた部分だけに着目する。その結果、「確かにそう読めぬこともないが、深読みの割りには事件の計画説を補強するには焦点がずれている」という「批判」が加えられる。これは「見当違いの一人相撲」である。続いて石川氏が槍玉にあげるのは、中山艦事件後の状況について著者が下した判断すなわち「(蔣介石)が追い詰められ突発的に行動する体の人物だと見なされておれば、(中山艦事件後も)あれほどの恫喝力を長時間発揮するのは不可能であった。人々には蔣介石の行動が突発的でなかったことが感知されていたのである」という記述である。石川氏は、著者は「この独自の判断にもとづいて(計画説という)結論を導きだしているのである」と述べる。しかしこの部分の判断は著者の独自の判断ではなく、共産党の指導者陳独秀が幹部党員の間だけで回覧されていた『中央政治通訊』誌上で、広東の共産党員と国民党員の間には中山艦事件後も事件の「余威」(継続する威力の意)が存在し蔣介石を恐れ憚ってる、と批判している事実に基づく(第四章注八三。同注四九も参照)。またこの判断は、(石川氏の無視した)先行する論証により得られた計画説という「結論」を基に、中山艦事件後の当事者たちの心理状態を推し量ったものである。石川氏の言うような「結論」を導き出すための独自の判断として置かれているのではない。

このほか石川氏は、第四章三節の廬山会議での汪精衛帰任問題をめぐる字句である「請汪速回任案」の「深読み」を問題にする。そして著者は「微言大義」を発揮しすぎた嫌いがあり、資料の精

読に基づくようにみえて実は「推測や推論である場合がまま見受けられる」と述べる。しかし石川氏は著者がこの字句を問題にせざるを得なかった決定的理由、すなわち「請汪速回任案」の速回任を「速やかに帰任する」と読むと廬山会議での討議内容に全く矛盾し「速やかに帰りて〔職〕に任ずる」と読まねば全体の文脈が意味を成さない点には、全く言及しない。また、この字句の解釈が、汪精衛と蔣介石の権力争いに重大な意味を持つことは原著に指摘したとおりである。ちなみに、著者は「請汪速回任案」の読みについて何人もの中国人研究者に確かめている。石川氏のお考えになるほど、お手軽ではない。論点の全体像を無視して、したり顔で「微言大義」を発揮しすぎた嫌いがあるなどと言うのは、「おかど違い」である。

次に、著者が「自説」を際だたせる為に何んでもかんでも反論を加えられるべき「通説」に仕立て上げているという、批判に答えたい。石川氏が問題にするのは、著者が第五章三節で一九二七年四月一二日の蔣介石のいわゆる上海クーデター（四一二政変）のおりには、「（通説）のいうように街頭での共産党員の公開処刑などはなかった」と述べた部分である。石川氏は「上海を血で染めた四一二反共政変」という通説風表現は知っているが、「街頭」での「公開処刑」が行われたという「通説」を知らないという。しかし最近出版された二冊の概説書すなわち栃木利夫・坂野良吉『中国国民革命』（法政大学出版局、一九九七年一二月）にも、狭間直樹・長崎暢子『自立へ向かうアジア』（中央公論新社、一九九九年三月）のいずれにも、四一二政変の際の出来事を示す写真として、街頭における共産党員の斬首刑の写真が掲げられている。石川氏がご存じないのは勝手である。

さらに石川氏は、著者が「公開処刑が行われた」という「通説」に拘泥する余り、デモ隊への発砲があった四月一三日以後の展開も蔣介石の意図でなかったと解釈せざるをなくなっている、と述べる。しかし著者はそんな勝手な解釈はしてはいない。石川氏も評価（?）してくださるとおり、著者は第五章で上海での国共両党の葛藤を共産党の会議記録を中心に詳しく分析した。そして「通説」となっている街頭での公開処刑の写真は、四一二政変に先立ち上海を支配していた山東軍閥による共産党員あるいは国民党員に対するの処刑であろうという判断を示しておいた。ちなみに、四一二政変直後の共産党の会議記録には公開処刑への言及など全くなく、蔣介石は少々の揶揄を込めて「老蔣」（蔣さん、の意）と呼ばれているだけである。また、四一二政変直後の蔣介石による反共派（国民党西山会議派）弾圧とこれに対する西山会議派からの「共産党を弾圧したのにいまだに連ソ容共をいうとは

なにごとか」と言う反批判の存在や、四月一八日の南京国民政府成立式典へのソ連軍事顧問の出席と成立式典での蔣介石によるソ連との友好を確認する演説などの事実から考えて、四一二政変直後の蔣介石は共産党の出方を見守っており四月一三日以後の展開も蔣介石の積極的に望むところではなかったのではないかと述べたのである（一六五―六頁）。そして、共産党が武漢で反蔣介石大会を開催した四月二一日以後には蔣介石が公然と共産党弾圧に着手した事実を指摘しておいた。ところが石川氏は、以上の論証部分に全く言及せずに、「四一二クデターの真相解明を掲げる（第五章の）後半部分は掛け声倒れに終わっていると言わざるを得ない」と述べるのである。これは言いがかりである。

最後に石川氏は最近公刊された旧ソ連アルヒーフの存在を特筆し、原著に対して断を下す。すなわち蔣介石評価に一石を投じるものではあろうが、国際的水準からいえばこの新資料を利用していない点において決定的に時代後れで不十分なものなのだと。そしてこの新資料としての旧ソ連アルヒーフの刊行により、中国国民革命史研究は「新資料刊行以前」と「以後」という研究史の区分がなされるのだと。果してそうであろうか。

一九九一年のソ連崩壊のあと未公開であったアルヒーフの公開が実現したことは、（石川氏は全く触れないが）原著の序章注一四で説明されている。著者は九六年の夏に国民党資料の閲覧で台北をおとづれた際に、当時は立命館大学留学中であった許育銘氏から中央研究院の若手研究者がこの旧ソ連アルヒーフ研究のためにロシアを訪れたことを知らされ、この人物に合うかと打診された。しかし「それには及ばない」と答えたことを覚えている。何故か。

今日の活発な現代中国研究は一九五〇年代にアメリカで始まったが、当初の主要テーマは第一次国共合作時期のソ連政府とコミンテルンの中国政策の動向分析であり、公表されていたロシア語やドイツ語の決議や議事録を含む資料を踏まえて綿密に展開された。このあと序章第四節で述べたとおり、ソ連側からも非公開アルヒーフを使用した研究書や非公開アルヒーフを援用した回想録が出版された。これらの研究によって明らかなのは、ソ連政府とコミンテルンの第一次国共合作時期の中国国民革命への対応は、中国内で作りだされた状況の事後追認に過ぎなかった事実である。追認政策を進めるスターリンら主流派とこれに不満なトロツキー派との間に激しい論争が展開されたことは、周知の事実である。石川氏の言うように、「誰の目にも明らかなように」、ソ連とコミンテルンが「国民革命と第一次国共合作に決定的影響を外側からおよぼした」わけではない。国共合作がなりたたなくなってはじ

めて、コミンテルンは従来の政策の無謬性を主張しトロツキー派の批判を封じる目的から共産党に暴動指令を出し、やがてはソ連政府もこれに続く。この間の経緯は第六章に述べたとおりである（二〇〇―二一四頁）。

著者は、旧ソ連アルヒーフの公開はコミンテルンとソ連政府の中国政策決定の経緯をより詳しく明らかにし、この方面の研究に資するであろうと考えていた。しかし、その事により著者の第一次国共合作研究の枠組みが、「時代おくれで不十分なものになる」などとは考えなかった。国家間の関係を損ねる資料の公開はみあわせるという「旧ソ連アルヒーフ公開法」の規定からも、画期的な資料は出てこないだろうとの読みがあった。もしも新資料の出現で研究上の枠組みを簡単に覆されるようであれば、そのような研究は常に新資料からの検証に晒される近現代史研究の業績とは言い難いとも考えていた。

果して一九九六年に旧ソ連アルヒーフを編纂したロシア語原本がベルリン自由大学から出版され、九七年にはロシア人学者を顧問に迎えて中国語訳が中共中央党史研究室から刊行された（石川氏の書評に詳しい）。そして、ソ連政府とコミンテルンの政策決定の背後にあった細かな事実が明らかにされた。しかし著者が第六章六節でもしやの期待を抱き、「いずれロシア側の資料が明らかになれば経緯が判明しようが」と断って分析を試みていた南昌暴動に関する資料などは一切ない。蔣介石の四一二政変関連の資料もない。国民政府とソ連政府の国交断絶をもたらした二七年一二月の広州コミューン事件に関する資料も皆無である。要するに現行研究に一石を投じるほどの資料はない。さらに難点をいえば、国民党一全大会で孫文が樹立を力説した「国民政府」を意味する（英語の national government に対応する）ロシア語表記が、中国語への翻訳をチェックするはずのロシア人顧問の存在にも関わらず、従来どおり「全国性政府」と訳されている。著者は原著の第一章注六四でチェレパーノフの回想録（中国語版）に出現するこの訳語の不適切さを指摘したが、その時点では背後の資料操作の意図を読み取れなかった。しかし今回この不適切な訳が踏襲されたのをみて、これは中国共産党の歴史理論である「新民主主義論」にいう孫文の「新三民主義」樹立（序章第四節参照）に抵触するからだと気づいた。要するに、孫文は中華人民共和国成立へと連続する「新三民主義」樹立という思想上の質的変化は遂げておらず、却って蔣介石の南京国民政府樹立に直結する「国民政府」の考えに固執していた事実をあからさまにしたくないのである。以上のように、「新資料」はロシア側と中国側からの、二重の政治的制約の下に「公開」されている。「新資料」の編纂者た

ちも、〈これは画期的資料集であり、研究は一変するぞ〉などとは述べておらず、〈これまでの研究に資する〉という控えめな言辞を連ねるだけである。

それにもかかわらず石川氏は、この画期的（？）新資料により著者の研究の時代おくれと不十分さを指摘しようとして、二つの事例をとりあげる。しかし資料の誤読により、却って著者の立論の正しさを証明する結果となっている。石川氏が批判を加えるのは、コミンテルンの中国代表であったヴォイチンスキーが蔣介石に対し全く妥協的であり、ボロジンこそが表面は妥協で中身は抵抗という立場をとっていたという、著者が第四章二節で示した見解である。著者の見解は、これまでの研究上の「常識」と『中央政治通訊』掲載の瞿秋白（共産党員）の報告に基づく。石川氏は、新資料によれば事実は全く逆であり、ヴォイチンスキーこそが蔣介石への抵抗者でありモスクワに対し妥協派のボロジンの召還を要求したのだという。しかし新資料を精確に読めば、当初、上海にあって陳独秀とともに国民党左派擁護の立場から国共合作の状況に原則的批判を加えていたヴォイチンスキーは、広州に赴いてボロジンから原則的立場からの批判が蔣介石の反発を招くと指摘されると、蔣介石（中間派）擁護の主張を展開しはじめる。さらにヴォイチンスキーは、ボロジンや広州の共産党員が実力派の中間派とのバランスを考えずに政権奪取を試みた為に中山艦事件が発生してしまったのだという批判を展開する。そして上海に帰ったあとで、蔣介石ら中間派との妥協へと方針転換した共産党の「修正決義」にボロジンが従わない事を理由に、モスクワに対して召還を要求したのである。中国語訳された新資料には、論点を明示するために要所要所が太字で印刷されている。石川氏がなぜ誤読されたのかは不明。

もう一つの事例は、邵力子が国民党代表としてモスクワのコミンテルン大会に参加した経緯に関する第四章三節の分析である。著者は、当時から公表されていた邵力子の演説（コミンテルン機関誌『インプレコール』に掲載）と『民国十五年以前之蔣介石先生』に記載されたモスクワの邵力子にあてた蔣介石の手紙、さらに邵力子自身の『回想』に基づいて分析した。そして邵力子の演説には、ヴォイチンスキーの主張である蔣介石（中間派）と国民党左派との妥協を正当化する論理が貫かれており、邵力子のモスクワ行きにはヴォイチンスキーが介在したはずだと指摘した。石川氏はこれに対し、新資料の〈邵力子のコミンテルンへの報告〉により、邵力子派遣に「ヴォイチンスキーが介在していないことが明らかになるだろう」と述べる。しかし新資料の〈邵力子のコミンテルンへの報告〉には脚注が付され、ヴォイチンスキーがコ

ミンテルンに対し邵力子を蔣介石の私人代表とみなし（国民党）左派との妥協を提起して蔣介石に伝えさせよ、と述べていた事実が明らかにされている。ヴォイチンスキーは介在しており、どうして「ヴォイチンスキーが介在していないことが明らかになるだろう」なのか。次に石川氏は、一転して著者を褒める。すなわちヴォイチンスキーの介在という予想ははずれたが、邵力子派遣は蔣介石の差しがねだと判断した著者の「鋭い直観」は、新資料により裏付けられたというのである。しかしこれは「鋭い直観」ではなく、上にあげた三つの「旧」資料に基づく「論証」である。勝手に「鋭い直観」扱いされると、当惑するしかない。

以上述べてきたとおり、石川氏の「書評」は原著の記述内容とこれに関連する資料群を精確に読まずになされた、「無謀な勇み足」である。「後書き」にも書いたとおり、石川氏には共産党関係の資料提供を受け、今回の「書評」も著者の希望による。このような反論を書くことは心苦しい限りであった。好漢自重せよ。

（立命館大学文学部教授　　）